牛肉低関税枠 米もう満杯

最短の2カ月で、ブラジル攻勢

米国による2024年の牛肉の低関税輸入枠について、年明けから2カ月で埋まったことがわかった。日本が他国と低関税枠を共有するようになった20年以降で最短だった。日本が円安を追い風に攻勢をかける一方、物価高の米国でブラジルも安さを強みに押し込み、枠が短期間で消化された。今後、和牛輸出にブレーキがかかるおそれがある。

税負担より重く 和牛輸出に逆風

米政府によると、1月1日が起点となる低関税の輸入枠について規定の6万5005トンに達し、2月27日に締め切った。日本の貿易統計によると、1～2月の米国への牛肉輸出量は324トンで前年同月比24%増。円安を追い風に堅調な伸びだった。

米国は自国産業の保護のために、他国から低関税で輸入する量の総枠を決めている。日本は20年から低関税で輸出できる枠を他国と共有。関税は1キログラムあたり4・4セント(約6・6円)になる。19年までは日本単独で200トンの低関税枠を使っていた。

共有の低関税枠に国や地域別の上限はなく「早い者勝ち」だ。関西地方にある輸出事業者は昨年12月上旬に米国に向けて和牛を輸出した。船が西海岸に着港したのは12月25日だった。港の倉庫に保管して「年明けと同時に通関手続きができるように備えた」と説明する。

日本と同様にブラジルも事前に牛肉を米国へ着港させていた。米国の物価高のなかで、安さを強みに商機を得ようと攻勢をかけていた。結果的に日本とブラジルの両国によって、低関税枠が2カ月で消化されたもようだ。前年は4カ月かかっていた。

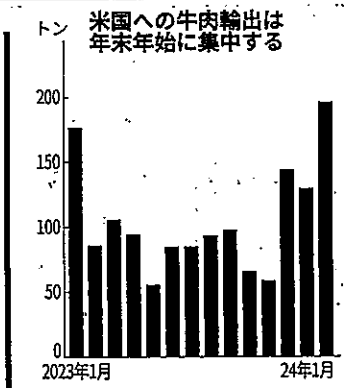
ブラジル産はスーパーの店頭に多く並び、日本産和牛は高級レストランなどで多く扱われる。消費者層は異なるものの、米国の輸入ルールのうえでは同じ「牛肉」。輸出を手がけているニイチク(東京・江東)の植村光一郎氏は「和牛を輸出できるチャンスをそのぶん失っている」と説明する。

枠が埋まって以降、牛肉には26・4%の関税がかかるようになっている。例えば、現在、日本からの輸出価格は和牛ロースが1キログラム1万円。関税は低関税枠の際の6・6円から2640円に跳ね上がる。

高級品に位置づけられる日本からのブランド和牛は、円安下であっても厳しい状況に置かれることになりそう。昨年は低関税枠が5月2日に締め切られ、同月は輸出が鈍った。今年も3月以降に輸出が鈍化している可能性がある。

輸出を手がける食肉卸大手のスターゼンは「予想よりも早く低関税枠が埋まった」と説明する。米国は有力なマーケットであるため、引き続き販売を強化していくという。

一方、新たな輸出先の開拓も必要。「台湾や香港などのエリアも強化し、要望や特性に応じた規格づくりや提案をしていく」としている。



(出所)農林水産物輸出入情報

農家は高価格・海外志向

貿易統計によると、2月の牛肉輸出量は695トンとなり、前年同月比で8%増加した。円安を背景にブランド和牛の輸出が伸長した。輸出先で最多となったのは米国(195トン)で、次いで台湾(114トン)、香港(106トン)の順だった。

畜産農家は飼料高などを背景に、高価格で販売できる和牛を中心とした高品質でコストも吸収しやすい牛肉の生産を志向している。日本食肉格付協会によると、23年は格付けをした約93万頭のうち29・2%が最高品質の「A5」等級になり、過去最高だった。

和牛は日本国内では需要が鈍っている。物価高のなかで、スーパー店頭には並ばなくなっている。そのため、生産者らは販売先を海外へ求めており、処理施設の新設や拡充などを進めている。

政府も農林水産物・食品の輸出に力を入れ、和牛はけん引役のひとつだ。和牛の輸出の壁は官民にとっての課題になる。

(筒井恒)